『教行証文類』の世界　第十回

顕浄土真実教文類一（二）

高田短期大学学長　栗原廣海

一、他力の回向

前回は、「教文類一」冒頭に述べられる文が、浄土真宗という仏教とはどのような仏教なのかを端的に示した文であることを述べ、そこに説かれる「回向」について、その一般的な意味を考察して紙面が尽きました。

今回は、親鸞聖人が「回向」をどのようにとらえておられるかについて考えることから始めたいと思います。最初に改めて冒頭の文を挙げておきます。

謹（つつしん）で浄土真宗（じょうどしんしゅう）を案（あん）ずるに、二種（にしゅ）の回向（えこう）あり。一は往相（おうそう）、二は還相（げんそう）なり。往相（おうそう）の回向（えこう）について真実（しんじつ）の教行信証（きょうぎょうしんしょう）あり。

（つつしんで浄土真宗という仏教をうかがうと、弥陀の本願力のはたらきとしての二種の回向があります。一つは往相回向であり、二つは還相回向です。その往相回向には、真実の教と行と信と証があります）

一般的な「回向」の意味は、「自ら修めた功徳を自らの悟りのために、または他者の利益のためにめぐらし、さし向けること」、つまり、仏道を行ずる行者が、自力で行う行のことでした。しかし親鸞聖人は、「回向」とは、阿弥陀如来が本願力をもって、自らの徳を衆生にふり向け救うはたらき、すなわち、「他力」であると理解されています。その「他力回向」に「往相の回向」と「還相の回向」があり、さらに「往相の回向」に「真実の教行信証」があるとされているのです。

しかし、聖人の、「回向」を「他力」とするこ

のような解釈が「教文類一」に説かれているわけではありません。「回向」を「他力」すなわち「本願力」とする解釈は、この冒頭の言葉以降の『教行証文類』全体に説かれ、その全体を理解することをとおしてはじめて明らかになってくるのです。他力の二種回向の闡明こそが、親鸞聖人における『教行証文類』撰述の命題であったとも言えます。その意味では、この文は「教文類一」の冒頭に位置してはいますが、書物としての体裁を敢えて無視して言うならば、『教行証文類』各巻の前に置かれるべき文であると言えるでしょう。「往相の回向について真実の教行信証あり」とおっしゃっているのは、まさにこのことをあらわしていると思います。

「往相回向」「還相回向」は、七高僧の三人目としてあげられる曇鸞大師が『浄土論註』のなかで最初に言われました。曇鸞大師は「回向」を、伝統的な理解に基づいて、仏道を行ずる行者の行として語っておられるのですが、親鸞聖人は漢文の独自の読み方をとおして、阿弥陀仏の衆生救済のはたらき、すなわち他力と解されたのです。そこで聖人は『浄土高僧和讃』「曇鸞和尚」第十四首に、

弥陀の回向成就して
往相還相ふたつなり
これらの回向によりてこそ
心行ともにえしむなれ

（阿弥陀仏の衆生を救済する他力のはたらきは、往相と還相の二つのはたらきとして完成した。これら二種の回向によってはじめて信心と念仏をともに得させていただけるのである）

とおっしゃっています。

二、真実の教

続いて、次のように説かれます。

それ真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

（そもそも「真実の教」を明らかにするならば、それは『大無量寿経』である）

聖人は、浄土真宗という仏教を説き明かしている真実の経典は『無量寿経』であると、教えの拠り所としての根本経典を明らかにしておられます。聖人が「真実の教」を『無量寿経』とされたこと、それに対して、聖人の師の法然上人は、『選択本願念仏集』において、『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を「浄土三部経」と名づけ、浄土宗の所依の経典と定められていることは前回に述べましたので、ここでは重複は避けて省略いたします。

三、経の大意

次に、なぜ『無量寿経』が「真実の教」であるのかが明らかにされます。

この経の大意は、弥陀、誓を超発して、広く法蔵を開きて、凡小を哀みて選びて功徳の宝を施することを致す。釈迦、世に出興して、道教を光闡して、群萌を拯い恵むに真実の利をもってせんと欲ってなり。ここをもって、如来の本願を説きて経の宗致とす、すなわち仏の名号をもって経の体とするなり。

（この『無量寿経』に説かれている教えを端的に言うならば、まず、阿弥陀仏が誓願をおこし、広くさとりの蔵を開いてことに愚かな凡夫を哀れみ、仏としてのはかりしれない徳を名号におさめて施されていることが説かれている。そして、釈尊はこの世に

歴史的人物として現れ、仏の教えを広めてあらゆる人々を救うために、真実の利益を恵もうとしてこの経を説かれたのである。こういうわけで、『無量寿経』は阿弥陀如来の本願を説くことを肝要とし、その本質は、仏の名号、すなわち南無阿弥陀仏である）

ここには、『無量寿経』に説かれている教えが、阿弥陀仏の本願と釈尊の出世本懐によって要約されています。後半の出世本懐については、『無量寿経』のいわゆる「発起序」の、「如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したもう。世の出興するゆえは、道教を光闡し、群萌を拯い恵むに真実の利をもってせんと欲す」によられています。

善導大師は、浄土の教えを、娑婆世界の教主である釈尊の、阿弥陀仏の招きに応じて浄土を目指せとのお勧めである「発遣」と、阿弥陀仏が浄土から招き喚んでくださる「招喚」においてとらえ、それを『観無量寿経疏』のなかで「二河白道のたとえ」として説いておられますが、これをうけて法然上人も、『無量寿経』を釈迦の発遣と弥陀の招喚をあきらかにした経であると見られたのでした。もちろん親鸞聖人も同様に二尊を見ておられるのですが、同時に、二尊を一体ととらえておられることにも留意しなければなりません。

『浄土和讃』「諸経意弥陀仏和讃」第二首に、

久遠実成阿弥陀仏
五濁の凡愚をあわれみて
釈迦牟尼仏としめしてぞ
迦耶城には応現する

と言われるように、釈尊は愚かな凡夫を救うために、阿弥陀仏がこの世に歴史的人物として現れてきてくださった応身仏であると理解しておられるのです。このことによって『無量寿経』こそが「真実の教」であることがいよいよ明確となるのです。